

秀友新聞

新院長のご挨拶



白崎 院長

このたび、十月より札幌秀友会病院院長を拝命いたしました。

脳神経外科専門病院である当院に勤務すること十余年、村井前院長がされていた院長業務を斜に見ながら、副院長たる麻酔科医として麻酔、ペインクリニックに従事してまいりました。

弘前大学を卒業したのが昭和五十八年、それから大学医局の命を受け十数回の転勤を経て、総合病院釧路赤十字病院に勤務したのが平成六年四月でした。平成十四年春までは順調に麻酔、ペインクリニックの仕事を続けていたのですが、医師不足にあおられて釧路赤十字病院から撤退すること

発行責任者
大橋事務長
第7号
発行日
令和元年11月12日



病院HP

を大学医局が決定し、行き場を求めてたどり着いたのがこの札幌でした。北区の外科専門病院に拾われたものの、仕事開始のその日に病院は譲渡になったことで外科手術はなくなり、透視専門病院に勤務する、麻酔をしない麻酔科医となつてしまったのです。

「ぶらぶらしている麻酔科医がいる」との噂を聞きつけて、元天使病院院長、故藤本先生が私を天使病院に誘ってください、再び麻酔科医としての仕事をしていたものの、その後、「一念発起して法科大学院に通う」という、仕事を続けながら通学する「二足のわらじ」を藤原秀俊理事長に許していただき、平成十八年六月に札幌秀友会病院に就職いたしました。

五十の手習いは上手いはずがない、と周囲の者に言われていたのはまさしく当たっていて、ストレスによる高血圧に襲われて已む無く撤退し、身に余る副院長職を肅々と続けさせていただいております。

村井前院長が突然の辞意を表明されたのち、青天の霹靂（へきれき）とはよく言ったもので、管理職務を全く経験したことのない、自分としては順風満帆に人生を謳歌している麻酔科医の私に、藤原理事長から院長職の依頼があったのです。

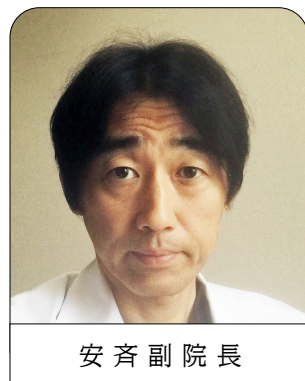
自分の人生のかじ取りで精いっぱい状況ではあります。以前に読みふけていたP・F・ドラッカーのマネジメント本を再度書棚から取り出して、果たして私で良いのか、と自問自答しつつ、お引き受けした次第です。

前に進むうとして空回りすることは目に見えていますが、空回りでも少しずつ前に進めればと思っております。皆様のお力をお借りして、札幌秀友会病院の将来を見据えて職務を全うしたいと思っております。未熟者ではありますが、どうぞよろしくお願いいたします。

脳卒中センターの認定

当院は藤原雄介 副院長を責任者とし、脳卒中治療を二十四時間三六五日実施出来る病院として、一般社団法人 日本脳卒中中学会より、令和一年九月一日付けで一次脳卒中センターの認定を受けました。

赴任のご挨拶



安齊 副院長

はじめまして。この七月から札幌秀友会病院に入職しました、脳神経外科の安齊公雄（あんざいきみお）と申します。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

札幌で生まれ育ち、平成二年に札幌医科大学を卒業した後に、脳神経外科病院としては有数の歴史と規模を有する中村記念病院（札幌市中央区）に入職しました。当時は大学を卒業する新人医師の八割以上は大病院に所属する時代であり

ましたが、なるべく早く一人前の臨床医になるために経験豊富な民間の病院への入局を選択した記憶があります。

以後、二十一年間にわたり、ありとあらゆる脳疾患の患者さまを診させて頂きました。専門として選択したのは脳疾患ではなく、脊椎・脊髄疾患でありました。脳神経外科医は大学を卒業後、通常は七年目から専門医という資格が取得可能となり、その資格が取れるとようやく一人前として扱われる風潮があり、その後自分の専門とする領域に関する知識、経験を深め、多くの患者さまを診療していくという流れになっておりました。私も先輩同様にその流れに沿っていくつもりではありましたが、当時の病院の事情と大先輩の勧めもあり、大学卒業後四年目から脊椎・脊髄疾患の患者さまを任される事になってしまいました。当時はそれが自分の専門になるとは思ってもいませんでしたが、結果として現在まで沢山の患者さまの診療に携わることができました。

そのまま専門の道を進むのが通常なのかもしれませ

んが、思うところがあり、平成二十三年に大病院を離れて市内南区の小さな脳神経外科に移りました。その病院は規模も設備も充分とは言えない環境でしたが、地域のかかりつけの診療所としての重要な役割を有しておりました。入院期間を気にする必要もなく、一人一人の患者さまとじっくり向き合うことができた五年間でありました。その後、先輩の誘いもあり、平成二十八年に北広島市の規模の民間病院に移りました。公立の病院がない地域であったことから、民間とはいえ公立病院と同様の役割を求められ、市や地元医師会との関係も濃密で、大変勉強になりました。特に医師会での活動は盛んであり、それまで経験したことがないくらい近隣の先生方との繋がりが深い三年間でありました。



当院の藤原理事長は、私の大学の部活動（バスケットボール部）の大先輩であり、また医師として最初に勤務し私に脳神経外科医としての全てを教育して頂いた、中村記念病院の大先輩でもあります。医学部の最終学年時には救急病院での研修として、当院での夜間診療を泊まり込みで経験させて頂きました。そのような経緯もあつたおかげで私は脳神経外科を専攻することを決意した訳であります。医師になった後も、学会や会合などでお会いさせて頂いた際によく声をかけてもらい、当院で当直をさせて頂いたり、脊椎の患者さまの手術させて頂いたこともあり、私の中では特別な病院でありました。このたび、こうして当院で勤務させて頂くことになり、当時の記憶が思い出されると同時に大変懐かしく感じ、尚一層、気が引き締まる思いであります。

さて、脊椎・脊髄疾患の患者さまの特徴は、正確に診断し治療する時期を逸しなれば、殆どの症状は改善するという点にあると考えています。言い換えますと、症状が完全に慢性化してしまった場合には原因を治療してもなかなか良くならないことも少なくありません。頸部痛、腰痛、手足のしびれ、痛みなどという症状が一般的であることから対象となる患者さまは非常に多いと思われまします。腰痛だけを例にあげましても、約八十%の人が一生のうちには一度は経験すると言われている、非常にありふれた症状であり、病気で働けない人の原因で最も多いものであると言われております。三年おきに厚生労働省が公表している国民生活基礎調査というものがありませんが、その中で男女ともに約十人に一人は腰痛を感じているそうです。ところがその中で病院にかかっている人は半分に過ぎず、腰痛を感じている人の半分は病院にかからずに我慢しているのが実態であります。ただ、これだけありふれている腰痛の診断は非常に難しいもので、慢性的に腰痛に悩んでいる患者さまの八十五%は検査を受けても異常が見つかからないというデータが発表されています。それだけ腰痛の原因を特定するのは簡単ではありませんが、中には手術を含めた緊

急的な治療が必要な原因が見つかり、肝を冷やすことがあります。

当院には優れた先生方や診療スタッフが揃っており、検査機器や治療器材も充分であり、多くの患者さまに有効な治療を提供できると信じています。お困り、お悩みの患者さまがいらっしやいましたら、是非一度ご相談頂きたいと思っております。今後ともどうぞ宜しく御願ひ申し上げます。



藤原雄介 副院長のご挨拶

二〇一七年四月に当院に着任した際にもさせて頂いた自己紹介ですが、もう一度させて頂きたい。

二〇一九年十月より、札幌秀友会病院副院長を拝命致しました藤原雄介です。

札幌市に生まれ、市立伏見小学校を卒業後、私立北嶺中・高等学校に入学しまし

た。当時はまだ北嶺も開校間もなく、私が六期生として入学して、初めて中学一年生（高校三年生まで揃ったという時期でした。小学五年生から始めたサッカーでしたが、北嶺入学当時はまだ部活はなく、同好会という立場でした。同好会に入りはしたものの、あまり積極的に練習に参加していなかった私に、今でも尊敬し続けている先輩から「お前は才能があるのだから、ちゃんと練習しろ」と叱咤激励を受けた事を鮮明に覚えております。そこからはサッカーに明け暮れていました。が、高校三年のインターハイ終了後から受験勉強に専念し、約四か月の猛勉強の成果もあり（この間に偏差値が三十上がりました）、筑波大学に合格しました。



藤原雄介 副院長

この時は医学部ではなく工学部に入学しています。工学部時代もサッカー部に所属しましたが、周りのレベルの高さから、その道を断

念しました。

工学部を卒業した後に、父と同じ医学の道を志す事を決意し、またしても猛勉強の末に筑波大学医学部に入学しました。入学当初は整形外科医、特にスポーツドクターを目指していた私ですが、学生時代の臨床実習や初期研修医時代に脳神経外科に魅了され、筑波大学附属病院脳神経外科医局に入局しました。脳神経外科医になってからは、ドクターヘリの基地病院や年間何千台もの救急車を受け入れている、いわゆる三次救急病院で昼夜を問わず、急性期脳脊髄疾患の治療に携わってききました。

急性期病院の役割は、その名の通り、急性期の患者さんの治療を行う事です。そのため急性期治療が終了した後は、直接自宅に帰れる患者さんは自宅退院となり、その後の治療はかかりつけ医を持ってもらい、依頼する事になります。また、自宅に帰れない患者さんは回復期リハビリテーションを経て、自宅退院を目指してもらうために転院となります。そういった急性期治療の性質や医局人事の都合上、数年に一回の転勤があつたため、お互いが信頼関係をもつてずっと付き合っていける患者さんが私にはほとんどおらず、そんな仕事に疑問を感じ始めていました。

そこで、当院の理念である「急性期医療から在宅療養まで」に出会い、自分が本当にしたかった医療を行える病院だと確信し、当院着任に至りました。

着任後は戸惑う事も多々ありましたが、当院スタッフや地域の皆様、患者さんに支えていただいていたかやっという事ができました。これまでは支えていたからには少しでも皆様の力になり、支えていける様に精一杯職務を全うする所存でございます。

これまで以上に当院が皆様に愛され、信頼される病院になるべく、頑張つて参りますので、今後ともよろしくお願い致します。

